

洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内

洛友会

〒606-8501

京都市左京区吉田本町

075-753-5270

www.rakuyukai.org

光黎明期のADSL顛末記

東京支部長

成宮 憲一

(昭49年卒)



1976年4月にNTT（日本電信電話公社）に入社し、2004年6月に富士通に移り、会社勤めが40年を超えました。昨年6月からはコムシスホールディングス社外取締役も務め、通信分野のメインプレイヤーである通信事業者、通信機器ベンダ、通信工事会社の全てを経験することになりました。

私は1951年5月3日生れの長男で「憲一」、京大に入学した1970年は東大の入試が中止となった翌年、70年安保と大阪万博の年です。団塊の世代1947年

（1949年の出生数は約270万人、1951年は約210万人、随分減ったとは言え現在の約100万人と比べると凄まじい数です。フォークソング、学生運動など華々しく活動した団塊の世代は「通り過ぎた跡にぺんぺん草も生えない」と揶揄され、それに続く私たちポスト団塊の世代は「しらけ世代」とも呼ばれ、井上陽水（1948年生れ）の歌「まっ白な陶磁器をながめては飽きもせず、かと言って触れもせず」がそのイメージのようです。

NTTに入社した5年後の1981年に真藤 恒氏が総裁に就任し改革を断行、1985年に民営化、1999年に再編、アナログからデジタルへ、銅線から光ファイバへ、電話からインターネットへ、正に激動の時代でした。NTT再編直前の4年間は技術調査部技術評価部門長を務め、海外を中心に技術動向、製品を調査し、

優れたものは事業導入を推進するとともに、R&D部門に対しアクセルとブレーキを踏み分け、ときにはハンドルを切る役割を担いました。こういうミッションの宿命として、海外かぶれと嫌われ、既存の組織と同じ活動は無駄、違う活動は邪魔と批判されるなかで存在価値を認めさせるために、トップ層を動かして提言を実行に移す強もての顔と、万ずお助け駆け込み寺の柔らかな顔の両面を使い分けました。

当時は、重要な経営課題である一般家庭への光ファイバ導入（FTTH: Fiber To The Home）を実現するため研究リソースを「光」に集中しましたが、思うようには進まない光黎明期でした。1995年頃から電話回線の高周波数帯を使用して高速データ伝送を実現するADSL（Asymmetric Digital Subscriber Line）が海外の展示会、セミナーで取り上げられ始めました。FTTH一辺倒ではADSLで他社にブロードバンドサービスの主導権を握られてしまふのではないかと考え、海外・国内ベンダのヒヤリング、資料ベースでの情報収集を強化するとともに、この人とは信ずる社内知識者数人に相談して方向感を確認し、アクセス網研究所長に伝送距離と伝送速度の関係、ISDNとの相互干渉などADSLの実力評価を依頼しました。パンフレットでの売り込みは多いのに実際に買える製品が少ない状況が続きまし

たが、1997年に入ってから「NTTは光にこだわってADSL導入を阻害している」というインターネット分野の有識者からの批判が強まり、折しもNTT再編が議論の俎上にのぼり、電話回線の開放問題がからまり経営的に微妙な時期でしたので、有識者、マスコミ等を招待してADSLテストベッド見学会を開催し、評価結果を発表し、懇親会で意見交換を行いました。

当初はイスラエルなどのベンチャ企業が先行して製品をリリースしていましたが、その後Alcatelが圧倒的なシェアを達成しました。ソウルの巨大な高層集合住宅群で行われたAlcatel製品を用いたKorea Telecomのトライアルを視察し、その伝でアントワープのAlcatel開発センタを訪問し、ADSLという物理レイヤの上位プロトコルがデファクト標準化され、アプリケーションが提供され、ブロードバンドサービスが現実のものとなりつつあるのを目の当たりにし、「古い木造家屋（ADSL）で調度品（サービス）を買ってしまふと新築マンション（光ファイバ）に引越すときにそれを持ち込むので、マンションが完成してから新しい調度品を提供してもgood」、「日本でのADSLサービスの寿命は多分10年程度、インフラ構築から見れば短い時間だが、ドグイヤーのサービスから見れば複数世代」と強い危機感を持ち、NTT自身がADSLサービスを

会報のメール通知サービス 登録受付中

「印刷された会報は要らない。パソコンで読む。環境保護に協力する。」という会員の皆様に、会報の発行をメールでお知らせするサービスを開始しました。ご希望の方は、「会報メール通知希望」とお名前を 洛友会 e-rakuyuu@kuee.kyoto-u.ac.jp までお送りください。

併せて、技術広報誌cueのメール通知サービスも受け付けております。

提供すべきと活動しました。

同じ危機感をもつ広報担当から、NTTがADSLに本気で取り組んでいることをPRするキャンペーンを持ち掛けられ、ぱらぱらと情報発信しても印象に残らないので、ADSLと言えはこの人と決めてその氏名を前面に出すのが効果的という広報戦術に従って、私に白羽の矢が立ちました。一般紙、業界紙、日経BPの各誌、テレビ放送などの取材が相次ぎ、ピーク時は毎日その対応に追われました。最もインパクトが強かったのがNHK朝7時のニュースでした。放映直後から「テレビ見たよ、頑張れ」という激励の電話、メールを多数頂き、国内便、国際便の朝のフライトでNHKニュースを見た出張者からも遅れてメッ

セージを頂きました。親戚や友人からは「元気にやっているようで何より。話の内容は分からなかったけれど」との反応でちよつとがっかりしました。変わったところでは集英社の取材を受け、プレイボーイの見開きの右ページに私のラフなセーター姿とインタビュー記事が、左ページに売れっ子アイドルの鈴木あみの笑顔が掲載されました。ヌードグラビアとカー情報だけでは生き残れない、読者に新しいトレンドを発信したいという挑戦の一環だったそうです。洛友会会員でプレイボーイに載ったのはきつと私1人でしょうね。集英社謹呈のプレイボーイを手元に残しておかなかったことが心残りです。

その後、サービス開発、設備、営業などの各ラインが動き出し、2000年にフレッツADSLサービス開始にこぎつきました。当初は「キラーアプリケーションは速度測定サイトとWindows Update」というブラックジョークがまことしやかにささやかれました。早速、フレッツADSLを申し込みましたが、住まい(NTT社宅)が杉並区・練馬区・武蔵野市の境界付近にあり電話局から遠い上に社宅内のISDN加入者からの干渉が強く、なかなかリンクが確立せず、確立しても速度が出ないという悲惨な状況で、FTTHを急ぐ必要を痛感させられました。マスコミへの露出はADSLが圧倒的でしたが、社内ではFT

THを技術面から支え、メディアコンバータの標準化、後継技術としてのGEPON採用を進めました。ADSLに1年遅れの2001年にフレッツ光サービスを開始し、その後、ADSLは2006年3月の1,500万加入(日本全体)をピークに減少に転じ、2008年6月には1,300万加入で光と逆転しました。

海外で講演する機会には、海外では一般的なADSLではなく、クレイジーだと言われたFTTHを取り上げました。常に受けをねらう関西人のDNAに則ったプレゼンテーションの冒頭を紹介して巻頭言の最後とします。

1枚目[In the long run](クリック)「We are all dead — Keynes」(笑)

2枚目[In the long run](クリック)「Access lines are all fiber — NTT」(拍手)

本部だより

洛友会本部役員会報告

平成28年度役員会は、去る6月5日(日)正午より、京都タワーホテルにて、木村顧問、長尾会長、3名の副会長、9支部長(代理を含む)、本部役員の合計20名の出席を得て開催されました。役員会は、昼食を済ませた後、荒木幹事長の司会で進められました。

まず、平成27年度事業報告と同

決算、平成28年度事業計画と同予算案、役員の改選がそれぞれ審議承認され、総会に提案されることになりました。また、2名の推薦会員が承認され、洛友会報の原稿依頼が承認されました。

引き続き、支部活動の状況が各支部から紹介され、意見交換を行いました。各々の支部も、支部の規模に応じて会員向けのさまざまなイベントを開催し、若手会員の掘り起しや会費納入率の向上にも取り組んでいます。参加メンバーの固定化・高年齢化が悩みのひとつで、地方に転勤や移住した会員は是非参加をお願いします。また、京都大学全体の地域同窓会への協力も行っていきます。

推薦会員

(平成28年6月5日承認)
・高島 秀聡 助教
電子工学専攻
(北海道大 平19年博)
・石澤 彰浩 准教授
通信情報システム専攻
(東京都立大 博)

洛友会本部総会報告

平成28年度本部総会は6月5日(日)午後、京都タワーホテルにおいて、関西支部総会に引き続いて開催されました。会員54名の出席がありました。

長尾会長の開会挨拶の後、荒木幹事長の司会で、平成26年度の事

業報告と決算、28年度の事業計画と予算案、役員の変更がそれぞれ承認されました。

続いて、荒木幹事長から洛友会本部報告と、佐藤事務局長による電気系教室の現況紹介がなされました。荒木幹事長からは、27年度の活動事業として、洛友会主催の先輩と学生との交流会や電気系教室懇話会の様子が紹介されました。また、洛友会が後援しているエレクトロニクスサマーキャンプについて、参加している学生会員の活き活きとした様子などが紹介されました。さらに、WEB名簿管理システムやHPからの閲覧方式について、手短かに説明がなされました。佐藤事務局長からは、現在の京都大学の吉田キャンパスと桂キャンパスの風景がそれぞれ紹介され、また、電気系教室の組織の変更や学生の就職状況などが報告されました。

役員の変更

平成28年度の役員は次の通りです。

顧問	昭30	木村 磐根(現)
会長	昭34	長尾 真(現)
副会長	昭49	松山 隆司
		(退…教室)
	昭53	小野寺秀俊
		(新…教室)
	昭48	安田 豊(現)
	昭49	西 亨(現)
幹事	昭41	荒木 光彦



昭51	佐藤 亨	(現…幹事長)
昭49	高岡 義寛(現)	(現…事務局長)
昭59	引原 隆士	(退…学科長)
		(退…学科長)
昭54	守倉 正博	(新…学科長)
昭56	和田 修己(現)	(現…)
昭53	藤田 静雄(新)	(新…)

会員寄稿

秋田で暮らすという贅沢

伊藤 篤

(平元年卒・東北支部)

秋田で生活を始めて二年になる。率直に言って、とても魅力的でいい街だ。すっかりお気に入りである。単身赴任なのだが自宅のある仙台には滅多に帰らないので、そのことで職場ではすっかり有名になってしまった。転勤後しばらくの間、何か家族と問題があったのかと周囲から本気で心配されたものである。心配はいらない。妻は青春期を秋田で過ごしたので、私が秋田を気に入ったことを自分のことのように喜んでくれている。今では秋田好きの伊藤ですっかり定着している。

さて、秋田のどこがそんなにいいのか。幸いなことに生活を始めた平成26年は、秋田県で国民文化祭が開催された年であった。おかげで、県内はお祭りムード、歓迎ムードで大いに盛り上がっていた。文化庁の説明によると国民文化祭とは、全国各地で国民一般が行っている各種の文化活動を全国的規模で発表し、競演し、交流する場を提供することにより、国民の文化活動への参加の機運を高め、新しい芸術文化の創造を促すことを狙いとした祭典だそうである。国体の文化版といったところだろう。

文化祭のイベントを見学しただけでも、あつという間に秋田県内を一周した気分になった。秋田県は、国指定の重要無形民俗文化財が17件と都道府県別で最も多い。二位愛知県の11件を大きく引き離している。例えば、秋田竿灯祭り

や男鹿のナマハゲが全国的には有名だ。この他にも、編み笠で顔を隠しながら篝火のもとで踊り続ける西馬音内の盆踊りや、柔らかな手踊りと大型の山車をぶつけ合う角館祭りのやま行事など、大勢の観光客が押し寄せる。私も引越しまるかに、秋田港近くに鎮座する土崎神明社祭の曳山行事を大いに楽しんだ。秋田竿灯祭りに出演する機会にも恵まれた。とにかく、それぞれのお祭りに個性的な特徴があつて、何度でも行きたくなる。この他にも横手のカマクラなど、文化財登録はされていないものの、全国的に有名な行事がたくさんあつて飽きることはない。

大曲の全国花火競技大会もお勧めだ。幸いなことに花火を間近で楽しめる有料観覧席が抽選で当たり、秋田生活初年度にチケットを入手することができた。何しろ全国から観客が押し寄せるので、この席を手に入れるのは難しい。大会当日は大曲駅発着の臨時列車が69本も増発された。大曲駅は単線なので、69本も増発するのは大変だろう。JR運行技術の腕の見せ所だ。

この大曲の花火がすごいのは当然として、私が現場で感動したの

は、観客が花火そのものを鑑賞にきていることだ。みんなが花火に見入っているのだ。以前、東京で暮らしていたとき、全国的に有名な某花火大会を見ようと出かけたが、だらしない格好をした若者であふれていたのだ。途端に見る気が失せてしまい引き返したものだ。大曲にはそんな観客は一人もいない。単なる大きな花火大会ではなく、大曲はあくまで花火「競技会」なのである。競技会ラストも感動的だ。雄物川を挟んで花火師と観客が向き合い、互いにペンライトや松明を振り合つて感謝しあうのである。あの大きな会場が一体感で包まれる。今ではNHKが全国放送しているようだが、是非とも現場で何度でも見ておきたい。もちろん、今年も観覧席を手に入れようと画策している。

話は変わって、秋田には国内最大の油田地帯があつた。秋田県民なら誰もが口ずさむという秋田県民歌には、「地下なる鉱脈無限の宝庫」との歌詞がある。地下資源が豊富だったため、地元秋田大学の工学部に相当する学部は、平成10年頃まで鉱山学部（工学資源学部を経て現在は理工学部）という名称であつたくらいだ。

秋田市内を流れる草生津川（くそすがわ）流域では今でも細々ながら石油の採掘が行われている。昭和30年代の最盛期には田んぼの中に何百本もの油井の櫓が林立していた。当時の写真を見ると、こ

の光景だ。ちなみに「くそず（づ）」とは、「元来「臭水」と書いて、「くそず」」、臭い水、つまり石油のことを表す。キリンのような格好のポンプが首をゆくりと上下させている。秋田到着早々、この様子が見たくて現場まで自転車に乗ったものだ。かつて田んぼだった産油地は、今ではすっかり宅地化されており、住宅やレストランのすぐそばでポンプが首を上下させている。こんなにも人の間近で採掘されているのか、と驚いたものだ。春には満開の桜との見事な共演も見せてくれる。

秋田は清酒が有名だ。とにかく飲み会が多い。もちろん、お酒以外にもおいしい食材が豊富である。ハタハタや北限のふぐ、だだみ、ギバサ、いぶりがっこ、じゅんさい、シドケ等々。意外なことに、りんごやサクランボなどの果物も豊富だ。こちらで暮らし始めて、間食もしていないのに3kgも体重が増えた。ご飯がおいしくて、ついつい大盛り飯をおかわりしてしまうのだ。幸いまだやせ形の体型なので、妻からはもっと体重が増えてもだいじょうぶじゃない、と有難い言葉を賜っている。

秋田というと豪雪のイメージがある。その通りである。それに加えて、冬季の秋田市内は風が強い。傘は壊れるだけで、何の役にも立たないので使わない。秋田市内では、雪は道路から猛烈な勢いで舞い上がるように吹き付ける。雪は上から降るのではなく、下から降

るのである。轟音を響かせて一日中強い風が吹く。それでも、冬の秋田は美しい。田んぼは、一面が雪で真っ白になる。林の木々は雪で化粧される。広大な雪原はまるで水墨画のような幽玄さだ。じつと眺めていると、はるか地平線の向こうまで引つ張られるような力を感じる。この雪が春に解けて川に流れ込む。雪解け水は青白く光り、豊かな流れとなって私たちに恵みをもたらしてくれる。

たしかに、都道府県別の人口減少率は一番大きい。少子高齢化が進んでいる。間もなく県民人口が100万人を割り込むのは確実だ。それでも、秋田は語りつくせないほどに美しく、彩り豊かだ。人々は優しく、仕事が非常にやり



やすい。はつきり言うが、秋田で暮らすということは贅沢だ。その機会を得られた幸運に感謝しつつ、贅沢を思う存分満喫している。

来島海峡と釣り

藤田 京一
(昭56年卒・四国支部)



皆さんは、「しまなみ海道」をご存じだろうか。

四国と本州を繋ぐ連絡道路には、東から順に、「神戸・鳴門ルート」「児島・坂出ルート」、そして「尾道・今治ルート」の3ルートがある。このうち、一番西の「尾道・今治ルート」は通称「しまなみ海道」と呼ばれている。

このしまなみ海道は、四国愛媛・今治と広島・尾道を島伝いに結ぶ全長約60km、ほぼ全線が片側1車線の自動車専用道路であり、他の2ルートと比べると規模が小さい。通行量はあまり多くなく、沿線の島々の観光地や住民の生活のためにも利用される地域密着の道路である。一つの大きな特徴は、自転車歩行者専用道路が併設されサイクリングを楽しめることであ

る。レンタサイクルのターミナルも整備されており、今の時期、休日ともなると気持ちよさそうに、海峡を横断する橋上をサイクリングしている人を見かける。最近では、自動車専用道路を通行止めにして国際サイクリング大会が開催されたことでも知名度があがっている。(興味がある方はぜひチャレンジを)

ところで、このしまなみ海道の一番四国・今治寄りにあるのが来島海峡大橋であり、付近一帯が私のお気に入りのエリアである。前置きが長くなったが、実は、最近、タイ釣りに若干はまっている。来島海峡はとも流れていく大潮の時には渦も見られ観光にも良いが急流で鍛えられたタイが有名である。そのタイを求めて、最近は何に1回のペースで遊漁船に乗っている。

私が釣りを始めたのは、10年ほど前、愛媛県西部の宇和島に単身赴任中、同僚のS君に初心者用の釣り道具を一式揃えてもらったのがきっかけである。そして3年前、私が自宅のある新居浜に転勤した際にS君と再会、タイ釣りに連れていってもらったようになった。よく行くようになったのは最近で、まだまだ初心者域である。

釣り方は「タイラバ」。タイラバはおもりのネクタイ+スカートの構成される疑似餌で(説明は省略させていただく。興味のある方はネットで)、各パーツとも形状・色・材質等が異なる多種のも

のが用意されており、それを組み合わせ使用する。当日どのような組み合わせのタイラバがタイに気に入られるかは、その時季の餌、潮の強さ、天気、明るさ、リールの巻きスピードなどに影響される。これに、その日のタイの体調、気分?といった理解不能な因子が加わる。

なぜ、こんなもので釣れるのか不思議だが、とにかく、タイだけでなく、あこう、コチ、時にはハマチも釣れる。タイ釣りといったが、夏場はあこうもメインターゲットである。あこうは白身のものでおいしい魚で、釣れるとタイ以上にうれしい。

釣り前日までに同僚や船頭さんに最近の釣れるタイラバ情報をゲット、それを参考に使用するタイラバをいくつか準備する。当日はそれを順番に試していく。さらに、隣の人が釣った時に、使用タイラバを盗み見しては釣りの合間に仕掛けを変更する。そして、遠くに近くに来島海峡大橋を眺めながら、一日中、タイラバを海底まで落としては巻き上げ、この繰り返しである。そして、タイが掛かった瞬間、全神経を竿先に伝わる感触に集中する。30cmぐらいの魚だとトントントントという当たり、50cmを超えるとガツガツガツという感触になる。タイは首を振るので、釣り上げるまでこれが繰り返される。このやり取りがたまらない。また、初心者でも結構釣れるのがうれしい。

釣果はいろいろである。昨年の年末まではまずまずだったが、年明けより絶不調。5月になってのつこみの時期に入りようやく釣果も上向きになってきた。

ところで、タイ釣りを始めてからスーパでタイを買うことは無くなった。自分で釣り、さばき、そして料理したタイの味は格別である。実は、我が家では魚の調理・料理は私の役割である。刺身の見た目は美しくなく煮付けの味付けも日によっておれるが、それでもとにかく大満足である。昔では「ぼうず」の時には妻に気兼ねして魚を買って帰る、と言う人がいるが、私は絶対にしない。これは意地である。

また、乗船代は妻には内緒である。唯一の趣味だからやらせて、とだけ言っている。

一匹当たりの単価はすごく高い。当然、お店で買った方が安いのだが、来島の急流に揉まれ引き締まった身、新鮮さ、何より自分でゲットしたという満足感、何事にも代えがたい。

話を来島海峡に戻すが、海峡部は狭く、潮が動いているときは川の流れのような急潮流となり、大潮の時には大きな渦も発生する。(当然、このような時・場所では釣りはできない。)また、船の航路になっており大型客船やコンテナ船などが通る。童心に戻ったような気持ちでボーッと見ていて飽きない。私にとって月に一度のこのエリアの釣りは、魚を釣る楽し

みに加え癒しの時間でもある。瀬戸内の島々、海峡と橋、そして船が織りなす動きのある風景、気持ち安らぎ、また、明日から頑張るぞ、という気持ちになる。

50代後半となりあと少しで会社生活を卒業となるが、「定年後はスロウライフ」というのは性分に合わない。日々忙しく、釣りの他にもいろんな楽しみを見つけ人生を豊かにしていきたいと思う今日この頃である。

近況報告と座禅体験

沖 雅雄

(昭63年卒・関西支部)

私は、昭和63年電気工学科卒業の後、修士課程2年を経て電機メーカーに就職し、今年で27年目の勤務となりました。これまでは自分自身ではあつという間の26年であつたの思いますが、気づかないうちに職場の周りは、年下の社員ばかりとなり、時の流れを痛感している今日この頃です。

入社してから24年間は鉄道車両に搭載する電機品やシステムの設計、製造業務に携わっていましたが、2年前の平成26年4月から、人材育成、技術・技能伝承に関する部署での業務に従事しています。異動の際は、これまで続けてきた「ものづくり」業務に直接関与できなくなることや少し残念に思っていました。今では「ものづくり」の経験も活かした人材育成研修の企画、計画、運営等、新

入社員から管理監督者まで、また、技術から技能まで幅広く、まだまだ半人前ですが「ひとづくり」に携わっています。

今回は、弊社の人材育成研修の中で「ものづくり」の技能伝承を目的として実施している技能競技大会について簡単に紹介し、また、この研修の一環として実施された「座禅修行」に参加する機会がありましたので、その体験談を報告いたします。

弊社では、毎年「ものづくり」の技能伝承を目的とした、全社の製作所（工場）対抗の技能競技大会が開催されます。この技能競技大会では、国家技能検定の職種でもある「機械加工」「構造物鉄工」「曲げ板金」「仕上げ」「電子機器組立」などの職種に關して、弊社独自の課題、採点基準を設定し、実技および学科の総合得点で順位を競い合います。各製作所（工場）で予選会が行われ、さらに、予選会に勝ち抜いた代表選手による全社大会が行われます。全社大会で優勝すると社長から直接表彰されるということで、代表選手、コーチ、スタッフ、その他大会関係者も含めた大きなイベントとなります。この実技競技大会の準備、事前練習を通じて、製造現場では、先輩のベテラン技能者から若手技能者に対し、その職種の技能が伝承されます。約2か月前から大会に向けての準備練習が始まりますが、製造業としてのものづくりの業務をこなしながら、技能競技大

会への準備練習をする必要があるため、選手、コーチ、スタッフ共に練習時間の確保が課題です。

この技能競技大会に向け、私たちの製作所（工場）では、代表選手、精神統一の訓練として、また、代表選手、コーチ、スタッフ、事務局間のチーム連携強化のため、毎年、本格的な練習が始まる前に、代表選手、コーチ、スタッフおよび事務局が一同に会し、京都 毘沙門堂 勝林寺にて「座禅修行」を行っています。

この座禅修行に事務局として参加できる機会がありましたので、その時の体験談を報告いたします。

毘沙門堂 勝林寺は、京阪電鉄/JR東福駅より徒歩10分ぐらいに位置する東福寺に隣接する小さな禅寺です。境内には狭い庭があり、縁側から庭を眺めることもできます。道場である座敷は物静かな雰囲気であり、座禅体験を実施した日は天気も良く、開け放たれた障子や窓からは時折さわやかな風が吹き込む落ち着いた空間でした。

住職からお寺の説明と座禅の仕方、説明があり、いよいよ1回目の15分間の座禅に入ります。足を組んで胡坐の姿勢となり、手を組み、眼をかすかに開いた半眼の状態を作ります。背筋を伸ばし、数メートル前に視線を整えます。深呼吸の続き、その姿勢で頭を無の状態、何も考えない状態を続

けます。

普段の生活で、いろいろなことを考える習慣（癖（？））がついてしまっているため、いざ、深呼吸の続き、何も考えない状態をつくるのは大変難しい。ついつい、「あゝ腰が痛くなってきたなあ」「あつ、風が吹いてきた、気持ちいいなあ」「そろそろ終わりか？」「他の連中もちゃんとできているのか」など、いろいろな雑念が浮かび、無の境地とは程遠く、落ち着かない自分に対し、はつと座禅中であることを思い出す始末。いかんいかなと思ひ、雑念を振り払います。それでも雑念が取れない場合、胸の前で合掌すると住職がやってきて、長い板状の棒でパンパンパンと3回肩口をたたいてもらえます。警策（けいさく）と言うらしいですが、この時ばかりは、身が引き締まると同時に、頭の中から雑念が不思議となくなります。再度、何も考えない姿勢での座禅を続けます。1回目、初めての座禅ということで要領を得ず、雑念ばかりの15分間でした。

その後、再度住職から無の状態を続けるやり方を説明していただき、2回目の15分間の座禅に。1回目よりコツがつかめ、無の境地にまでは至りませんでした。落ち着いて、何も考えない状態を続けることに集中できたのではないかと思います。今回の体験では、15分の座禅を2回するだけの体験でしたが、自分自身にとっては、ちょうどいい適度な長さであり、回数であったと思います。20分、30分と時間を増やしても、また、3回、4回と回数を増やしても、集中力が持続できなかったらどう思います。説明↓座禅（1回目）↓説明↓座禅（2回目）と合計1時間程度の体験でしたが、普段、ガラガラと過ごしてしまう時間に比べると充実した時間であったと思います。

座禅後には、事前予約していた精進料理をいただきました。これまで、精進料理を食べる機会はありませんでしたが、座禅が終わった充実感、達成感の中での食事であり、また、50歳を超えた小生には味付け、分量とも健康的な食事であり大変満足でした。しかし、若手選手には量が少なかつたようで、お代わり用のお櫃のご飯をすべて平らげてしまいました。食後の住職からのお話でも、「お櫃を平らげたのは前代未聞です」とのこと、参加者全員で大笑いしました。和やかな雰囲気での座禅体験となりました。代表選手も精神統一ができ、大会本番でも緊張することなく競技に集中できたのではないと思いつつ座禅体験を終りました。

会員皆さんも体験してはいかがでしょう。きつといい経験になると思います。

古代史を推理するロマン

大西 和夫

（昭和39年卒）



万葉仮名への興味をきっかけに、文字記録のない上代史を探るのに第二の人生を費やしています。特に史料と遺物との隙間を繋ぐストーリーを推理するのにロマンを感じています。

（1）金属器と文明の到来

紀元前3世紀以前の昔、日本にもたらされた青銅器が始まる文明の波が歴史の歯車を動かします。錫を含む青銅は弥生土器の焼成と同程度の温度で加工できるので、青銅器が西日本から東国に至るまで広く各地で作られるようになり生産工具に革命を起します。

次いでもたらされた鉄器によって農地開発が一段と進みます。しかし鍛冶加工技術は伝えられても、高温を必要とする良質の鉄を作る技術は機密とされ倭国に容易に伝えられませんでした。製鉄が可能になるのは、焼成温度の高い陶器・須恵器が作れるようになる5世紀後半以降になります。確実な製鉄遺跡が確認されるのは5世

紀末から6世紀初めです。それまで8百年もの間、倭国の鉄器材料はほぼ全量、鉄鋌や鉄斧の形で朝鮮半島の南端、伽耶（辰韓や任那とも言われる）から北九州を拠点に供給されていました。

(2) 祭祀用青銅器の始まり

北九州の須玖岡本遺跡（春日市）で、紀元前1世紀頃からの300点にのぼる銅銚や銅鐸の鋳型が出土した多数の工房跡や複数の鉄器鍛冶炉跡も見つかっています。この一帯は倭国最大の金属器加工拠点でした。須玖岡本遺跡からこの時代に類のない30面もの漢鏡が副葬された王墓が見つかりました。これら遺物は奴国の丘歴史資料館に展示されています。それから数世代後に当たる奴国の王に「漢委奴国王」の金印が紀元57年に授与されたと『後漢書』に書かれています。「委」は「倭」の略字です。発見された金印は福岡市博物館に展示されています。

その後北九州の王墓は奴国の隣国・伊都国（糸島市）に移り多数の漢鏡を有する王墓が3基も発見されています。中国の青銅器や伽耶の鉄器材料は、伊都国で全て検査され、奴国で加工され、瀬戸内海を通じ西日本、畿内から東国にまで分配、供給されていました。弥生時代後期には中国の中古青銅器が材料として西日本から畿内、東海まで潤沢に流通し、工具だけでなく大型の祭祀用青銅器に加工されました。東西に長い列島にある幾多の地域国家を越えて交易の

輸送路が確保されるには何らかの連合国家が形成されていたことを示しています。伊都国がその拠点となる中枢国家でした。

共同体村落では大型の祭祀用の青銅器である銅剣や銅鐸が土中に埋納され、豊穰を祈る祭りに取り出されては田神や山神の地霊を祀っていました。それが1世紀頃から九州から始まり3世紀にかけて西日本、東海と、結界に当たる村落境界に埋納されたままになります。奴国の原町遺跡の48本の銅戈、出雲の荒神谷遺跡に並べたままの358本の大型銅剣、また加茂岩倉遺跡で39口の銅鐸などが埋納状態で発見されたのは象徴的です。畿内や東海地方では大型の銅鐸が発掘されています。近江の大岩山の尾根から出土した銅鐸は24口、最大1・3mもあり、2世紀後半から3世紀初めの物と見なされています。しかし各地で出土したこれら祭祀用青銅器に関する歴史は大和王権が編纂した『記紀』には全く残されませんでした。

(3) 銅鏡によって広がった信仰

大型青銅器が放置されるより前から墳墓に副葬された中国の漢鏡が次第に目立つようになり、前述したように大量の漢鏡を副葬した王墓が奴国や伊都国にありました。1世紀までに作られた5期漢鏡までは主に北九州に分布し、国内分配システムの中枢は漢帝国と交易できる北九州にありました。鏡背面の画像も明確な意味を持つようになったのは規矩四神鏡、内

行花文鏡からです。どちらも天と地の中国古代からの宇宙観を表現し、天の神と地の神の存在を象徴するものです。北九州で最後の王墓となった3世紀初頭の平原1号墳が伊都国にあり、副葬されていた40面の銅鏡の内、5面は大きさ8咫（径46・5cm）の内行花文鏡です。この内行花文鏡は漢鏡を元に拡大模倣した倭国製でした。更に32面もの漢鏡の規矩四神鏡、巻頭太刀、勾玉、耳飾り、首飾り用の多数のガラス玉なども副葬されていました。これらは伊都国歴史博物館に展示されています。この伊都国の女王は中国の宇宙観をもとに自ら創始した天の神に仕えた巫女であると思われる。巫女時代にこの内行花文鏡を天の神の依代として祀っていたでしょう。

2世紀前半の6期漢鏡が流入する頃から漢鏡の分布する北九州の量は畿内全体のそれと均等します。分配システムに変化が生じたようです。そして神仙思想の神々を表す画文帯神獸鏡などが現れ始めます。2世紀後半以降に作られた7期漢鏡より畿内での数が断然多くなります。分配システムが変わり北九州を通じ手に入る漢鏡の分布の中心が畿内に移ります。北九州の中枢勢力が畿内に移ったのです。倭国で大きな勢力移転が2世紀後半以降に行われたことを示します。

銅矛・銅鐸祭器の埋納から漢鏡副葬への祭祀の変化、そして漢鏡

の紋様の意味の変化から、新たな世界観を持つ信仰が生れたと思われ、その内容は想像するしかありません。

(4) 外からと内から見た2つの古代史

外から見た『魏志倭人伝』（以下『倭人伝』という）は3世紀末に中国で、内から見た『日本書紀』は8世紀前半に日本で編纂され、どちらも3世紀前後の日本の歴史を記述した部分があります。しかし後者には詳細な記述がありません。その紀年は信頼できません。

(1) 卑弥呼の登場と銅鏡

『倭人伝』によれば、倭国は男王の治世が7、80年続いた後、紀元165年から185年の頃、倭国の乱の長い戦いが続きました。戦いは女王卑弥呼が共立されて収まります。卑弥呼は共立された時まだ十代の巫女でした。卑弥呼の背後に2世紀末まで倭国を事実上統率していた伊都国の女王の存在が想起されます。2世紀後半の漢鏡の分配を通じ新たな世界観を倭国全体に広めた女王は、自分に代わり若い巫女を倭国の都とした邪馬台国の女王に推したと推定されます。それが女王卑弥呼です。『倭人伝』にあるように邪馬台国は伊都国に一大率（数カ国を治める国守に相当する官職）を派遣し、帯方郡と倭国の交易を監察したとあります。卑弥呼は248年まで60年間余り女王として倭国に君臨しました。その間、魏に4回遣使しています。卑弥呼が初めて遣使し

たのは、魏の將軍司馬懿が朝鮮半島の楽浪郡と帯方郡の支配を回復した直後の238年でした。この時卑弥呼に「親魏倭王」の金印や銅鏡百枚等おびただしい豪華な賜物が授けられました。

邪馬台国の位置を特定するのにこの鏡の特定は考古学上の最大の課題になっています。この鏡は3世紀中頃の副葬品として出土する規矩四神鏡、円行花文鏡、画文帯神獸鏡、三角縁神獸鏡のいずれかにほぼ絞られます。いずれも鏡の紋様は宇宙観に基づく天地の神を表象したのですが、前2者は2世紀以降、後漢時代から倭国に舶載されています。後2者は2世紀後半から3世紀にかけて舶載されたのですが、紋様は長生と子孫繁栄を祈る神仙思想の神々を表したものです。中国で1面だけ見つかった三角縁神獸鏡は倭国のための特製品と考えられます。魏鏡として中国から舶載され、その後大和王権によって模倣し作成され、国々の首長に7世紀まで配布され続けました。古墳から出土した数はすでに500面を越えています。大和王権の威信財として、不老長生と子孫繁栄を祈願して国々の首長に下賜され、首長が亡くなり前方後円墳に埋葬される時副葬されたものです。

(2) 卑弥呼に仕えた男王達

『倭人伝』に出てくる邪馬台国はヤマト国と読み、卑弥呼は名前だけでなく日巫女のことでしょう。登場する弟王の名前は記録されてい

ません。卑弥呼に仕えた数代の男
王の最初は彦火火出見命と考え
られます。製鉄に関連した名前と
思われますが、亡くなった時の
諡号が神武天皇です。詳細は省き
ますが『日本書紀』の神武東征と
『倭人伝』にいう倭国の乱は時期
的に合致する可能性が高いことを
数理統計的に示せます。彦火火出
見命の父は鷦鷯草葺不合命と言
い、「うがや」とは「上伽耶」の
ことです。伽耶は製鉄遺跡の多い
ところ。また『記紀』の皇孫
降臨神話は下伽耶（駕洛）国の神
話とよく似た処があります。

1世紀以降の考古学的遺物とし
ての漢鏡の出土分布が示す配分シ
ステムは、楽浪郡、伽耶から九州、
瀬戸内海、畿内までの海運を支配
した伊都国が構築したものであ
り、同時に中国の青銅器、伽耶の
鉄器の分配をしたシステムでもあ
ります。倭国の乱は畿内で行われ
た倭国の覇権争いと考えられま
す。『日本書紀』から推定すると、
南河内から大和南部・葛城地方に
影響を及ぼしていた伊都国の勢力
が、先住の北河内の饒速日命や
大和北西部・富雄地方の長髓彦の
勢力と争い、大和の磐余の戦いで
勝利し大和東部の纏向地方に倭国
の都を開いたのです。『倭人伝』
にある卑弥呼に仕えた男王達は葛
城地方に根拠を持っていた王（天
皇）達でしょう。この大和に生ま
れた新政権はすでに奴国や瀬戸内
に鉄器加工工房を保有し、北九州
から瀬戸内海、畿内への交易路を

確保していましたが、安定した
鉄器供給を望んでいた倭国の国々
の首長は伊都国の巫女が倭国の女
王になることを歓迎するのは当然
でした。3世紀後半以降の畿内の
古墳から鉄器が目立って出土する
ようになります。

大和玉権を確立したのは
御間城媛を娶り、倭国の四方に将
軍を遠征させた御間城入彦です。
諡号は崇神天皇です。天皇陵とし
て比定されている纏向の北にある
4世紀前半の行燈山古墳は史学的
にも信頼度が高い初めての天皇陵
です。第7代孝靈天皇の皇女に崇
神天皇の巫女を務めた倭迹迹
日百襲媛がいます。大和の守護神
とされる大物主神が妻問いした相
手が若かりし時の百襲媛です。ま
た、『古事記』によれば大物主神
の娘が神武天皇の后になっていま
す。即ち百襲媛は初代の神武天皇
から第10代の崇神天皇の代まで長
い間活躍した足跡が『記紀』に残っ
ています。一方、卑弥呼の在位期
間60年間余りは古代の天皇の平均
在位年数は10年程ですから、天皇
6代分に相当します。

纏向には巨大な前方後円墳が突
如2世紀末から3世紀半ばにかけ
て6基築造されます。その内、最
大の箸墓古墳（墳長278m後円
経150m）が百襲媛の墓と記さ
れています。3世紀最大であるこ
の墓は、『倭人伝』に記す卑弥呼
の墓の大きさ経百歩（138m）
に合致します。築造は3世紀中頃
とされ、卑弥呼が亡くなった時期

と合います。6基の古墳は卑弥呼
と卑弥呼に仕えた男王（即ち政事
権を任された天皇）達の5代分あ
るいは宗女と墓も含む墓でしょ
う。同じ巫女として同時期に重なる
卑弥呼と百襲媛は、墳墓も同じ
とされ、同一人物の可能性が高い
のです。発掘が完全にされたのは
ホケノ山古墳1基だけです。盗掘
されていましたが画文帯神獸鏡2
面と内行花文鏡1面分の鏡片が見
つかっています。箸墓古墳は宮内
庁の管理下で発掘されずに真実は
眠ったままです。

3世紀頃の倭国では政事権を
与った男王は祭事権を持つ女王に
仕えていました。『倭人伝』には
女王の名として日巫女（卑弥呼）
と記録され、女王に仕えた男王の
名は記録されませんでした。倭国
では政事権を継承した男王の名は
口承で7世紀まで『記紀』の原本
となった『国記』に名前が残りま
したが、巫女としては倭迹迹日百
襲媛の名を残すのみです。

(5) 日の神の巫女から託された鏡
伊都国の女王は東の日向峠に向
けて水銀朱に塗られた割竹木棺に
埋葬されていました。それが平原
1号墳です。棺の東に大柱が立ち、
秋の収穫祭の頃に日向峠から昇る
太陽が射す柱の影はちょうど棺を
貫くようになっていきます。倭国の
天の神は日の神であったことを想
像させます。元々は中国の天帝で
ある北極星が支配する天と大地を
象った内行花文鏡の紋様は、日本
ではいつの頃からか日輪の光芒を

象った紋様と解されるようになり
ました。

平原1号墳から出土した女王の
副葬品と同じ内行花文鏡と剣と勾
玉は、この女王から卑弥呼にも託
されたと思像されます。これ以降
8尺の大きさの鏡は作られなかつ
たのか、3世紀以降の古墳から出
土した内行花文鏡は小型化し
160面を越えますが、この大き
さのものは出土していません。

崇神天皇は倭国の神々を序列化
し、神器を皇居内から大和笠縫邑
に遷し、次の垂仁天皇の時、東に
行き伊勢に奉ったと『書記』に記
されています。東の海を望む伊勢
に祀られた時、日の神信仰の性格
が顕わになります。史実的には5
世紀、21代雄略天皇の頃、伊勢
を支配したことが確実です。この
日の神に天照大神と名付け高天原
神話を作ったのが第40代天武天皇
です。7世紀に伝わった『金光明
經』の須弥山の切利天にならって
高天原と35神を創造し、その最高
神を天照大神としたのです。8世
紀始め伊勢に社殿を立て遷宮した
のは皇后であった持統天皇です。

伊勢神道『後鎮座伝記』によれ
ば伊勢神宮の神器は円行花文鏡と
同様の（実物は明治天皇しか見て
いない）紋様を持った8尺の大き
さの八咫鏡となっています。

(6) 邪馬台国位置論とあとがき
邪馬台国が九州にあったか大和
にあったかの邪馬台国位置論は決
着していません。『倭人伝』だけ
では九州説でも畿内説でも矛盾が

出ます。楽浪郡と帯方郡を奪回し
た魏の將軍司馬懿、魏の朝廷に東
夷の国々の調査報告をした帯方郡
太守、魏志倭人伝の編者である西
晋の史官らが、どうしても魏の敵
国である呉の東に位置させるた
め、邪馬台国が伊都国の東方に
あったにもかかわらず伊都国の南
の南に位置づけたのです。当時の
「里」の単位である長里（430m）
と短里（76m）を使い分けてね
つ造したと考えますが、これ以上
の話は紙数が足りません。

科学には公理がありますが歴史
には公理がありません。証明には
演繹法でなく、帰納法と数理統計
学しか使えないもどかしさがあり
ます。出版した『邪馬台国と大和
王権』（文芸社）で畿内説の論理
は証明できたと確信しています。
しかし半年前に出版した自分の著
作の大方をすでに忘れていたので
がっかりしています。覚えていた
間に何でも記録しておくことの大切
さをかみしめています。本は電子
書籍化もされる時代になりました。
消えることがないPCメモ
リーは私の脳の半分以上を代用
し、既にサイボーク人間と化して
いるこの頃です。段々事実と空想
が見分けられない世界に近づいて
います。

隙間を繋いだストーリーに対する
批判はmonish3@nifty.comへ。

岐路をふり返って

外山 毅

(昭和49年卒)



私は電気系教室を卒業し、電機メーカーに就職、30年の間半導体技術者として開発業務に従事した後、特許庁に転職、足掛け10年に亘り審査官として特許審査業務に従事し、昨年四月に辞職しサラリーマンとしての宮仕えに終止符を打ちました。

還暦を乗り越えこれまで進んだ道は、岐路に差し掛かった際の選択の積み重ねからなり、時間的・気分的な余裕が出来た今振り返ってみることにします。

まず自らの意思を持って選択することになる最初の岐路は、高校進学時です。大阪で生まれ育った私は、自宅から歩いて5分の地元高校か、電車・市電で一時間のO高校かの選択で、父が鉄道車両メーカー勤めで、子供の頃城東貨物線(現大阪東線)のSLを見て鉄

道好きに育った私はO高校に進学しました。

次は高校2年の末の理科系か文科系かの選択です。これは迷うことなく、現国・古典から逃れる理科系を選択しました。高校三年の志望大学・学部を選択に際し理科系では、医学部、理学部、工学部から選択することになりました。親は医学部に行けば病気になるのも安心と言いますが、血液型を判定する生物の授業で、自分の指に針を刺して血を見る事が出来ず、同級生に針を刺してもらった始末に、医学部を消去。数Ⅲの部分積分の授業で手こずっている時、隣の席の京大理学部志望者が授業中に複素関数の積分を勝手にやっているのを見て、理学部も避けて工学部を選択した。工学部の学科選択は、当時の人気TV番組「スパイ大作戦」に出てくる何でも作ってしまうエレクトロニクス・エンジニアのかっこよさから電気系を選択。

次に高3の冬にいよいよ受験校を決める際も岐路が待ち受けていた。自宅通学出来るO大学か下宿の母校かの選択で、当時片道2時間強の片町線(現JR東西線)・京阪線・京都市電で通う母校の場合には下宿しないで通学すると親に言いつて選択。担任の先生が、最後の成績表に「祈る京大合格、ダメなら浪人して頑張れ」と書いて背中を押して頂き滑り込みで合格。先生には同時にクラスの同窓会委員をやってくれと言われて以

来卒業45周年のクラス幹事をいまだ続けている。電車に乗るのが楽しいみの通学も、接続をミスると片道2時間半近く、1回生の冬12月にギブアップし、平野神社の向かいの邸宅の離れに下宿することに相成った。

学部に進むと電気・電子工学実験が必修で、名簿順で4名の班を作り、実験、レポートを分担した。この時同じ班で最も頼りに成り実験はお手の物のT君と知り合い、現在に至るまで、適時情報交換、色々な相談をしてきた。

四回生の卒業研究の選択では、研究室紹介で川端研は、講座名が量子エレクトロニクスと高尚な響きと研究室の先生方に接してやっていけそうだと感触で選択、幸い修士も川端研に配属して頂いた。

母校を出て社会に出る際は、人生で最も大きな選択の一つの会社選択がまわっていた。大阪離れの出来ない私は、箱根の関所を越えて江戸(関東)に出る気が無く、関西の電気メーカーから二社の選択とした。両社に会社訪問し、先輩の話も聞いたが、なかなか決め手を欠き、お二人の大先生にご意見を伺いM社に決めた。

会社に入る時、配属希望と言うものがあり、通信か半導体を希望したら、半導体のメモリに配属された。当時メモリの主流はDRAMであったが、不揮発性メモリ(後の主流となるフラッシュメモリに至る)に配属され1K

ビットのNVRAMの設計からスタートした。この後、退職前に企画検討したフラッシュメモリが512Mビット、実に30年間に6桁近い集積度の向上の現場に立ち会ったのは、技術者として幸運だった。

会社生活では、上から言われたら自ら決める場面は無いと思っていて、入社数年後、担当のメモリと共にマイコン部門に異動するかメモリ部門に留まるかの岐路が与えられた。主流意識の強かったメモリに留まる選択を行ったがこの選択が幸か不幸かを後に考えさせられる。

五十歳迎いで、関係会社に転籍含みの出向の打診があった。この時、洛友会とM社で一年先輩であるKさんに相談した。本体で頑張る気があるなら断り、戻る気が無ければ出たらとの示唆を受け、出向を辞退した。この選択が幸か不幸かも後に考えさせられる。

半導体シリコンが産業の石、電子立国と浮かれていたのかも知れないが、規模の拡大と共にメモリ事業が乱高下を繰り返すうちに、時の「選択と集中」の荒波に飲み込まれた。半導体部門を本体から切り出し、同業者間での合併の時代に入った時、半導体丸から下船しようとの思いが初めて生じた。

そんな時、某県から産業科学振興の職のお誘いを受け、30年弱勤めた会社を出るか、残るか岐路に立った。この選択が私にとって最も悩んだもので、オファーを受

けて回答するまでの3日間は、出るか残るか自問自答を繰り返した。結果は残留であった。30年の技術職の経験が行政職に転ずる障壁を越えられなかった。

そうこうするうちに、入社式の時、漠然とこの会社で定年退職を迎えるのだろうかと思った会社から、合併会社に承継転籍することになった。

合併会社に転籍してしばらくすると、企業風土の違いというものを肌で感じながら合併会社にあるがちな出身母体の相違点の融和を第一に努め一年が経過する時、台湾の子会社への駐在員の打診を受けた。テレビドラマ風に2、3日考えさせて下さいと言って2日後に台湾赴任の意思を伝えた。台北に滞在した一年間は、週日昼間は英語で仕事、夜は林森北路の駐在員向け飲み屋で怪しげな日本語会話、土曜日は北京語の個人レッスン、日曜日は鉄道、高速バス、航空機を乗り継ぎ日帰り、台湾鉄路(鉄道)の乗りつぶしを行った。阿里山鉄道を残すのみの一年目、帰国の意向の打診があり、即座に帰国を選択した。思い返すと、個人の意思を酌んで尊重する懐の広い会社であった。技術職を離れ出し、いよいよ転身を具体化する時がやってきた。そんな折、目に留まったのが、特許庁の任期付き特許審査官の公募である。母校を卒業する際、国家公務員上級試験に一応は通っていたが、先に決まった民間に就職した。また中途でも

地方公務員の誘いを辞退した手

前、三度目は合格すれば箱根の関所を越えて江戸詰め公務員の心づもりで受験し、合格したのが10年前五十路の半ばであった。この受験は、正規採用試験に準ずる教養、専門試験、二段階面接とあり、技術系公務員受験本を買い込み、3か月の準備期間、知能検査的正多角形の切断面や、ラプラス変換、伝達関数等々の一夜漬け的勉強を行ったのが懐かしい。なんとか合格したが、当該年度の中途入庁者の最長不倒(平均37歳)であった。息子のような新卒採用組と一緒に入庁研修・演習・試験を行った。入庁して一か月過ぎ、川端研関西在住OB有志の会合で、川端先生に、先生の推薦を受けて入社したM社(合併会社で退職)の退職と特許庁への転職をご報告したところ、体に注意して弁理士に成って帰って来いとの激励を受けた。何とか約束を果たせた。

審査官に昇任するには一か月半くらい続く試験が課せられた。ある課目の講師が講義の最後に著書がある旨を述べられた。試験前に購入しようとする絶版、調べると都立中央図書館にのみ1冊、館内閲覧限定と分かり、試験の前週、仕事帰りに閲覧し、講義関連の章をコピーした。同期入庁者で試験勉強をしていたので皆にコピーを回覧したところ、コピー部分から大問題1問が当たり、同期の者に年の功を感謝された。

特許庁では、入庁前のバックグ

ラウンドが考慮されてか、メモリ

および半導体・電子デバイス分野の特許審査に明け暮れた。転職時石の上にも三年は、何があっても宝塚に戻らない積りで出たが、気が付けば丸9年を超えて、弁理士になる資格を有する長官証明を受ける業務経験を積んでいた。65歳まで延長の機会が与えられるところ、単身赴任が10年目を機会に辞職する岐路を選んだ。この間、月一の実家帰省以外の週末の多くは、JR東管内を普通列車で乗りつぶしを行い、先に情報セキュリティの専門家に転身された先輩のKさんには毎年数回銀座で飲み会に誘って頂き大阪に帰りたくなる気持ちに叱咤激励を受け審査官を無事終了した。箱根の関所を越えて、昨年4月宝塚の実家に戻り、今年3月法定義務研修の単位を取得し4月に日本弁理士会に登録し、自宅の一室を事務所として、弁理士事務所を開設した。個人事業立ち上げに際し、T君、高校・洛友会の同級生であるM君にノウハウを伝授してもらった。また最初のビジネスにおいても洛友会会員のタテとヨコの繋がりがからご支援・激励を受け感謝している。民間企業での技術者と特許庁の審査官の両方を経験する珍しい経歴を生かして、特許を出願する技術者と審査官とのコミュニケーションの潤滑油となり、知財立国に微力ながら貢献することをライフワークでは無いがラストワークとする最後の岐路に分け入ったところ

ある。

終戦直後のこんな話

留岡 寛

(昭和39年卒)



大東亜戦争が終わった直後のある晴れた日の暑い昼下がり、一人の少年が三高の事務室の窓口に立っていた。受付の窓を開け、校長への面会を乞うた。彼は海軍系学校特有の夏用の真っ白ではなかったが国防色の正式の軍装を身に着けていた。短く上着と細身のやや短めのズボン、細面の鼻筋の通った面立ちの凛々しい姿であった。当時海軍系の制服は若い女性の憧れの的であった。受付の女性は暫く目をぱちくりさせ見とれていたが、校長の元へ走った。

校長の前に立ったその少年は、直立不動の姿勢で、海軍式の脇を締めた敬礼をし「何の何某、只今戻って参りました」と言った。校長は「ご苦労であった」と答えた。その少年は言った。「今日はお願いがあって参りました。戦争は終わりました。在学しておりました海軍経理学校は廃校となり

りました。私は中学卒業後の受験に際し、当三高と海軍経理学校を受験し両方とも合格しました。しかしながら戦局厳しい折、お国のために少しでもお役にたきたいと経理学校に入りました。しかしながら戦は終わり、これからは新しい平和国家建設のために努力せねばなりません。そのために微力でもお役にたきたいと思います。幸い当第三高等学校の入学試験には合格しております。どうか入学を許可して頂きたいと思えます」と。校長はじつと聞いていたが、件の女性に書類を持ってくるように命じ、それを調べていたが、はつきりと言った。「判りました。入学を許可します。」即断即決であった。少年は言った。「有難うございます。実はもう一つお願いがあります。」

「何だ。」と校長。「只今、私は入学を許可されました。私と同じ境遇にある者が、他にもいると思います。どうか彼らにも私と同様の措置を取って頂きたいと思えます。」

己の抜け駆けを競うこの頃何と言う言葉であろうか。

校長は答えた。「あい、判った」これも即断即決であった。

暫くして、少年の家に入学に関わる書類一式が送ってきた。これには親が吃驚した。校長に掛け合ったのは、少年単独の意志で取った行動であった。

その少年、東松孝臣氏はその後京大電気(昭和27年)を卒業、関西

電力の役員としてまた大阪工大・摂南大学の総長・理事長として活躍された。この話は大阪のさる午餐会で同じテーブルで戦時に関する講演だったかの時、同じ京都伏見の出身であり中高校からの先輩・後輩であることもあり話が弾んだ折に出たものである。「校長先生はどなたでした?」「かなへさんと皆言っていたな。」後で調べると「前田鼎」氏のことである。私は東松氏の「二つ目の御願」に痛く感動した。蜘蛛の糸にもつとぶら下がれと言ったのである。

二つ目のお願いの効果はあったかどうかは長い間判らなかつたが、近年「お前のお蔭で助かった」という人が出てきたので確認できたと東松氏は語った。

前田校長はどんな人だったか?以前京大時計台下の展示館で、確か復員者に暖かかったと書いてあったように思ったので時計台下まで確認に行った。その展示はもうなかったが、当該箇所を管轄しておられる西山教授がたまたまおられたので伺った。先生は「そのような話は聞いたことがあり、調べておられる方がいた」とのこと。「そのような断を下したのは三高だけ!敗戦に伴い、反軍部の動きがあり、それを恐れてよその高校ではかかる決断を出来なかつたのではないか」とのことであった。

同窓会だより

卒業60周年記念同窓会開催

昭和31年京都大学電気工学科卒業生の「卒業60周年記念同窓会」を平成28年5月に京都大学の時計台記念会館で行いました。我々は戦後間もない昭和27年に工学部が学科別の募集に変更になった年に電気工学科志願して60名入学し、昭和31年に卒業しました。卒業後は「洛友会31」同窓会として今日まで60年間同窓会を継続実施して



まいりました。我々も80歳余の高齢にもなり、ご逝去になった方も多く同窓会在籍者は現在37名ですが、健康の問題等で参加できない方も多く、今回の参加者は15名（夫人1名含む）となりました。

出席された方は皆さん全員お元気で、近況報告、健康に関する情報等活発に意見交換して懐かしい時間を過ごすことができました。

今回の60周年行事で「洛友会31」全体の同窓会は閉幕し、以後は関東、関西地区で其々開催することになりました。

辻垣 淳一（昭和31年卒）記

支部だより

四国支部総会報告

平成28年5月27日（金）、高松市内の「JRホテルクレメント高松」において、第61回洛友会四国支部総会が開催されました。

本部ならびに教室から兩宮尚之教授にご出席いただき、四国内からは25名の会員が集まりました。

総会は、今岡四国支部長（昭和42年卒）の挨拶で始まり、冒頭、この1年間でご逝去された3名の会員を偲び、黙祷を捧げました。続いて、電気系教室の大先輩である香川県出身の寒川恒貞氏（明治35年卒）について、箱根、横浜間にわが国初の国産機材による送電線の建設、福沢桃介氏と協同して四国水力電気株式会社設立、

電力の消費拡大を狙った電気製鋼会社の創設など実業家として数々の業績を挙げるとともに、ふるさとにも熱い思いを寄せ、地元小学校の建設資金の寄進、消防組合への消防ポンプの寄贈などをされ、今なお地元で慕われ続けていることの紹介がありました。

次に、兩宮教授から、先輩と学生との交流会や会員専用Webサービスなど、洛友会の運営状況についてお話しいただきました。また、吉田キャンパスや桂キャンパスの様子や電気系教室の近況などについて、写真を交えながらご紹介いただき、支部会員は自らの学生時代を思い起こしながら興味深く聞き入っていました。

続いて、四国支部幹事から平成27年度事業報告、会計報告、平成28年度予算案について説明があり、満場一致で承認されました。また、支部役員の改選について審議を行い、満場一致で承認され、新役員を代表して山地新支部長（昭和48年卒）より就任の挨拶がありました。

総会終了後、松村先輩（昭和29年卒）の乾杯音頭で懇親会が始まりました。先生方や久しぶりの友人と酒を酌み交わしながら歓談しているうちに、あつという間に予定の時間となり、最後に恒例となっている「逍遙歌」と「琵琶湖周航の歌」の大合唱で会を締めくくりました。

その後、有志一同は同ホテル20階のバーにて、高松の夜景を眺め

ながら深夜まで親交を深めました。

なお当日の午前中は、兩宮先生にお時間を少しいただき、支部会員有志と平賀源内記念館、屋島山頂近くに修復された古代山城屋嶋城の城門などを探訪いただいたほか、昼食には讃岐うどんを召し上がっていただきました。

繁樺真一郎（平15年卒）記



第61回洛友会四国支部総会 H28.5.27 高松市JRホテルクレメント高松

北陸支部総会報告

平成28年5月28日（土）富山市の「いきいき亭」において、平成28年度北陸支部総会を開催しました。本部ならびに教室を代表して、大村善治教授をお迎えし、北陸支部からは、13名が出席しました。

支部総会前には、例年同様、講演会を開催いたしました。今回は

大村先生に「宇宙プラズマ波動と地球放射線帯」と題し、地球を取り巻く磁場により引き起こされる様々な現象について、観測データや、理論式から導かれたシミュレーション結果を、音声や動画を織り交ぜながら講演していただきました。

支部総会は、葛原支部長より、北陸支部は人数の面でも地域の広さの面でも適度な大きさで、互いに顔の見える支部である。また、先輩方も支部総会に積極的に参加されており、存在感のある支部であるといった挨拶がなされました。続いて大村先生より、本部の近況等として、主な事業や会員専用Webサービスなどについてご



説明いただきました。更に、電気系教室の近況として、吉田・桂・宇治キャンパスの様子、教員の方々の異動状況などについてご説明いただきました。最後に、支部幹事から支部近況報告、会計報告に関する議案を説明し、満場一致で承認されました。

総会終了後、記念写真を撮影し、その後、懇親会を開催しました。懇親会は、冒頭、葛原支部長のご挨拶、西村顧問の音頭による乾杯で幕を開け、先生方や先輩・後輩と酒を酌み交わして歓談し、楽しいひと時を過ごしました。最後に琵琶湖周航の歌を全員で合唱し、前川公男先輩(昭47年卒)のご発声のもと、万歳で散会となりました。

笠川隆(平10年卒) 記

関西支部総会報告

平成28年6月5日(日)、京都タワーホテルにおいて、関西支部総会が54名の参加を得て開催されました。

総会に先立ち、「文化経済大国を目指して」と題して講演会を開催しました。講演会では、西日本電信電話株式会社相談役の大竹伸一様(昭和46年卒)より、日本の文化や国民性を活かして、いかに経済発展につなげていくかというテーマでご講演いただき、参加者にとって大変興味深い講演会となりました。

支部総会は、森総務幹事の司会



のもと安部川支部長のご挨拶で始まりました。平成27年度事業報告ならびに決算報告があり、また平成28年度事業計画および予算編成、支部会則の一部改正ならびに平成28年度関西支部役員改選について審議され、いずれも承認されました。平成28年度の新役員は、

支部長 駒谷喜代俊(昭52年卒)
副支部長 土井 義宏(昭52年卒)
総務幹事 田中 康博(昭58年卒)
会計幹事 沖 雅雄(昭63年卒)

の各氏です。

支部総会に引き続いて本部総会が開催され、洛友会会長の長尾先生のご挨拶ののち、洛友会事務局長の佐藤先生より平成27年度事業報告ならびに決算報告、および平成28年度事業計画案および予算編成案、役員の変更についてご説明があり、いずれも承認されました。続いて、洛友会幹事長の荒木先生

より洛友会本部の活動を、佐藤先生より電気系教室の現況についてご説明いただきました。

総会終了後は引き続き懇親会が開催されました。長尾先生のご挨拶の後、洛友会顧問の木村先生に乾杯のご発声をいただきました。懇親会中は終始和やかな歓談の場となり、楽しい一時を過ごすことができました。終わりに、西台様に先導いただき「洛友会の歌」を全員で斉唱し、最後に西川先生より締めのご挨拶をいただき散会となりました。

糸谷亮祐(平13年卒) 記

第105回関西支部ゴルフ競技会報告

△プレー状況▽

第105回関西支部ゴルフ競技会が平成28年5月21日(土)武庫ノ台ゴルフコースにて開催されました。



第105回 関西洛友会ゴルフ競技会 参加者集合写真

当日は天候にも恵まれ、アウトは福川氏(昭和30年卒)、インは細田氏(昭和36年卒)の始球式でプレーを開始し、合計18名(うちシニア8名)が競技に汗を流しました。

結果は以下のとおりです。

(シニアの部)

優勝 細田純一郎 (S36年卒)
2位 福川 幸勇 (S30年卒)
3位 松尾 茂 (S38年卒)
(一般の部)
優勝 西田 篤史 (S63年卒)
2位 西 亨 (S49年卒)
3位 吉田 豊彦 (S56年卒)

△懇親会▽

プレー終了後、西田氏(S63年卒)の司会により、表彰式兼懇親会が開催されました。

懇親会は福川氏(S30年卒)の乾杯のご挨拶からはじまり、表彰式では、優勝者に景品および優勝カップが手渡されたあと、代表して細田氏(S36年卒)より優勝報告を頂くとともに、関西洛友会ならびにゴルフ競技会の更なる発展を期待するコメントを頂きました。

△お知らせ▽

洛友会関西支部では同窓生の懇親を深める機会として毎年2回(春・秋)にゴルフ競技会を開催しております。次回は平成28年10月15日(土)を予定しております。若い方も含めて、多数の皆様のご参加をお待ちしております。

△連絡先▽

西田 篤史 (S63年卒)
谷口 充展 (H21年卒)
連絡先 050-7104-1202
(谷口)

taniguchi.mitsunobu@ds.kepc.co.jp

訃報

講昭15	大沼 丈夫	28.3.3
昭16	永安 弘	28.2.10
昭17	菊池 武己	27.10.5
昭21	武田 邦彦	28.4.27
昭23	中村善三郎	27.9.17
昭23	西脇 正道	27.7.31
昭25	阪部 貞夫	28.4.28
昭27	徳永 治	28.5.10
昭28	下村 信夫	28.4.14
昭31	南 宗宏	28.3.16
昭34	秋葉 豊知	28.2.13
昭36	原谷 敬	27.8.8
昭38	近藤 敬治	28.3.25
昭38	松本 恵一	28.3.21
昭40	岡 健太郎	28.2.2

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。